

障害者施設で働く若手職員による「福祉・表現」をテーマにした作品展の開催 またその記録集の作成

Good Bubble 実行委員会

活動の目的

誰もが自分らしく暮らせる社会を目指して、主に文化活動を通して、健常者と障害者をゆるやかにつなぎ、お互いを理解するきっかけとなる場をつくること。

上記の「お互いを理解するきっかけ」とはどんなことであるのか、普段、障害者施設で働く職員であるメンバー自身が「表現活動」を通してそのことに向き合い、その一つの捉え方を可視化する。また展覧会という「場」をつくることで、健常・障害を問わず様々な人たちが集える機会をつくる。

活動の内容及び経過

障害者アートをテーマとしたイベントやそれを扱う商業施設は増えてきている。また、施設にアーティストが派遣されて当事者と協同して制作にあたる事例も多く見かける。本企画が取り上げたかったのは、施設で働く職員たちの「感性」である。2014年以来、自分たちなりに誰もが自分らしく暮らせる社会を目指し、障害者も健常者も共に楽しめる音楽イベントを開催してきたメンバーたちに自分の日常の中の「感性」を形にし、鑑賞してもらうことで「福祉」の見え方・捉え方をより柔軟なものとする。

2019年4月より活動開始。メンバー各々の職場等で作業。2019年8月13日から同18日まで岡山県天神山文化プラザ・第5展示室にて、「or」展を開催。会期中、養護施設の児童と、作品制作に使用したループマシンによる「音」遊びのワークショップを開催。

会期終了後、各々に記録等の整理。記録集の作成開始。2020年1月、NPO法人・灯心会・松田圭一氏をゲストに迎え、「or」展の振り返りと「福祉と表現」をテーマにメンバーと対談。記録集収録。同年3月「or」展記録集発行。

活動の成果・効果

展覧会期間は、8月のお盆週間で且つ台風での施設休館が一日あった（開場5日間）にもかかわらず、来場者は328名となった。来場者の内訳も、福祉施設職員、施設利用者、利用者の親族・友人、福祉団体職員といった「福祉」に近い人たちははじめ、音楽・写真・デザインに関わる人たち、福祉を学んでいる大学生など多岐にわたった。アンケートでは「施設の利用者のアウトプットはよく見かけるが、携わる人たちが感じたことをアウトプットするというのが面白かった」、「福祉に特化した色んな視点を見た印象、なかなか見ることのない展示で興味深い」、「障害のある人と社会をつなぐ架け橋になる可能性を秘めた企画だと思った」といった感想が寄せられた。「or」展のことを詳しく知らな



いま会場に入った親子も「子どもと楽しめる空間」と感想をくれていた。

福祉施設職員が美術展をすることは、場を開くという意味においても、静かに鑑賞することを求められるといった理由で、なかなか美術館等に行きにくいことの多い障害者・関係者も、気兼ねなく来場でき、過ごせる良い空間となった。

アートの語源はラテン語のアルスで、意味は「術」である。狭義の意味での「美術」は専門性を持った美術家の為す技だ。でも世に云うアートはもう少しフレキシブルであって良い。何かを伝えたり、繋がったりするための「術」だ、と。お題目でない「障害者も健常者も自分らしく生きられる社会」の実現にはどんな術が有効なのか、この点においてメンバーが提起した世界観は来場者に響いていた。

また記録集において、それぞれのコンセプトや展示画像をまとめ、対談を通して企画全体の振り返り・総括することが出来た。記録集は県内関係先に配布する。

今後の課題と問題点

2014年と2018年に行った音楽イベント、そして今回の作品展と、自分たちの置かれている環境や人脈を活かし、いずれもこれまでに岡山で観ること・触れることがなかった空間をカタチにしてきた。課題と問題は、イベントや作品展は良くも悪くも単発的だということ。本来の目的は「障害者も健常者も自分らしく生きられる社会」の創出であり、単発的でない、より日常に根差した活動も必要だと痛感している。

- 代表者：谷口健太 ●所在地：岡山市中区
- E-MAIL：goodbubblefes@gmail.com
- 設立年：2014年 ●メンバー数：6名